

平成 30 年 6 月 25 日現在

機関番号：32630

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26380853

研究課題名(和文) 道德、意図、確率、因果～不確実性と因果構造からみた道德的判断の心理学モデルの構築

研究課題名(英文) Moral, intention, probability, and causality: a construction of psychological model for moral judgment in terms of uncertainty and causal structure

研究代表者

中村 國則 (Nakamura, Kuninori)

成城大学・社会イノベーション学部・教授

研究者番号：40572889

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：道德的判断に関する心理学的モデルを構築するため、意図性・因果構造・および不確実性の3点を考慮した実験的検討を行った。その結果、(1)意図性判断に対して確率的要因が影響していること、(2)意図性判断に対して因果構造が大きく影響していること、の2点を明らかにした。また、副次的な研究として道德的判断が母国語と第2言語で異なるという先行研究を踏まえ、同じ現象が日本語話者についても成立するかを検討し、現象としては確認できるものの、測定バイアスの観点からの新たな説明も見出した。

研究成果の概要(英文)：To construct a psychological model for moral judgment, this project performed experimental investigations manipulating intentionality, causal structure and uncertainty. Results of the experimental investigations demonstrated the following two points: (1) probabilities of outcomes affect intentionality judgments, and (2) causal structures also affect intentionality judgments.

研究分野：意思決定，思考，推論

キーワード：道德的判断 意図性判断 確率 因果構造

1. 研究開始当初の背景

申請者は近年意図性(中村, 2013a)・道徳的判断の問題(Nakamura, 2013)に取り組んできた。これらの問題は近年、脳科学(e. g., Greene et al, 2001), 生物学(e. g., Hauser, 2007), 言語哲学(Knobe, 2003), 法哲学(Haidt & Graham, 2006)を含めた広い範囲の研究者の関心と呼び、実験哲学(experimental philosophy; Knobe, 2003)という新たな分野をも生み出すものとなっている。そもそも、現実的な問題を考えても、震災や原発事故に至った判断の是非や意図・責任といった公共的判断に関する問題は依然として大きな社会的関心のもとにあり、そもそも普通の人々が犯罪の善悪や意図をどう判断するかは、裁判員制度が採用されている司法環境を考えれば極めて重要な問題といえるだろう。

2. 研究の目的

申請者はそれらの問題の背後に確率という隠れた要因が存在することを示してきた。確率という概念は意思決定という問題を議論するうえで欠かせないものであり、様々な領域でその重要性が指摘されてきたものである(たとえば中村, 2013b)。そして申請者のアプローチは、道徳性・意図性といった公共哲学的概念が、確率という視点で統一的に説明できる可能性を示している点で非常に興味深いものといえる。本申請課題の第1の目的は、以上の背景を踏まえて道徳性・意図性判断に対する確率の影響をより詳細に検討することにある。

続いて本研究の第2の目的は、道徳性・意図性判断に対する因果構造の影響を検討することである。確率という問題を考えるうえで因果構造という問題が不可分であることは様々な分野で示されており、そして後述するように近年道徳性判断の分野でもその重要性が指摘されている(Waldmann & Dieterich, 2007)。このような知見を踏まえると、意図性判断における因果構造の影響は十分考えられることであり、その中で確率が果たす役割を特定することは、公共判断の問題を理解するうえでも重要であると考えられる。そこで本申請課題では因果構造という要因を新たに取り上げ、道徳性・意図性判断への影響とその確率との関わりを分析する。

そして本研究の第3の目的は、確率・因果からみた意図性・道徳性判断の心理学的モデルを構築することである。本研究で取り扱う道徳・意図・確率・因果という4点は、それぞれ公共選択や意思決定を議論するうえでの基本概念といえるものであり、心理学を含めた社会科学や公共哲学などの分野で幅広く議論されてきたものである。しかしながらこれらを統合的に議論した心理学的研究はこれまで存在しない。そのような背景の下、

道徳性と意図性といったある種の価値観の問題に対し、確率や因果という視点から定量的なモデル化を行うことは、人間の思考、特に公共という問題に対する理解に対し大きな意味を持つと期待できるものである。

3. 研究の方法

意図性・道徳性判断に対する(1)確率推論の影響、(2)因果構造の影響の分析、(3)統合的な心理学的モデルの構築、の順に計画を進めた。この目的のため、個々の側面を操作した実験刺激文を呈示し、その刺激文に基づいた意図性・道徳性判断を求め、条件間で判断結果を比較するというを行った。

(1) 確率推論の影響

Knobe (2003)は意図性の判断に結果の価値が影響することを示したが、それに対し申請者は意図性の判断と確率評定の双方を測定し分析したところ、結果の価値に従って意図性判断とともに、確率評価も変動することを示した(中村, 2013a; Nakamura, 2013a)。しかしながらこのような知見は確率と意図との相関を示すのみで、確率の意図に対する因果的影響は明らかにはせず、道徳性判断(“事業計画は道徳的に許されるかどうか”)との関連も明確ではない。加えて検討した状況もKnobe (2003)の用いた企業の事業計画状況に留まるものであり、知見の一般的な妥当性も定かではない。そこで本申請課題では(1)中村(2013a)でみられた確率と意図性の関連の追検討、(2)確率の意図性に対する因果的影響の直接的検討、の2点を検討した。

(2) 因果構造の影響

ある事象の確率を考慮する際、事象の生起メカニズムを表す因果構造が重要であることは統計的因果推論の分野で広く認識されているものであり(心理学、認知科学的な研究については中村, 2009を参照)、道徳的判断の文脈でもその重要性が明らかにされている(Waldmann & Dieterich, 2007)。そこでは、道徳のジレンマの判断の際、ある行為によって結果的に少数の人が犠牲になる場合より、少数の人に直接行為を働きかけて犠牲にする場合の方がより道徳的に非難すべき状況と判断されることが示されている。

このような因果構造の影響は、意図性判断でもあり得るものである。Knobe (2003)の手続きを例にとると、彼の研究では会長は会社の利潤を目的とし、結果的に環境を汚染(あるいは改善)したといえる。このような状況は、会社の利潤を求めることを原因として、結果的に環境に汚染、あるいは改善がもたらされたと解釈できるだろう。そしてこのような状況では、会社が環境改善を目的とした計画を実行し、その結果として利潤・損失が伴う状況も考えることができるだろう。すなわ

ち、因果構造としては、行為の主体(会社)と客体(環境)があるとして、主体自身の事情を目的として、結果的に客体に何かが生じる場合と、客体に対する働きかけを目的とした行為が、主体にも何かの結果をもたらす場合の双方があり得るだろう。先行研究では前者の状況は検討してきたものの、後者の状況ではほとんど検討を加えていない。加えて、これらの状況間での意図性と道徳性の判断の関係は全くといっていいほど検討されていない。

そこで本申請課題では、このような因果構造の意図性・道徳性判断に対する影響を検討した。具体的には、平成 26 年度の手続きをもとに、そこにさらに因果構造要因を加え、検討する。因果構造の操作としては、行為の結果が主体に影響するか客体に影響するかを操作し、検討した。

4. 研究成果

(1)意図性判断に対して確率的要因が影響していること、(2)意図性判断に対して因果構造が大きく影響していること、の2点を明らかにした。また、副次的な研究として道徳的判断が母国語と第2言語で異なるという先行研究を踏まえ、同じ現象が日本語話者についても成立するかを検討し、現象としては確認できるものの、測定バイアスの観点からの新たな説明も見出した。主要な研究成果は5.で示してある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

1. Nakamura, K. (2018). Harming is more intentional than helping because it is more probable: The underlying influence of probability on the Knobe effect. *Journal of Cognitive Psychology*. 30(2), pp.129-137. (査読あり)
2. Nakamura, K. (2016). Our morals really depends on our language: The foreign language effect within participants. *Proceedings of the Thirty-eighth Annual Conference of the Cognitive Science Society*, pp.960-965. (査読あり)
3. 中村國則. (2015). わが身に降りかか

る災いはわざとではない: Knobe 効果に対する確率と因果構造の影響. *認知科学*, 22(3), pp.447-455. (査読あり)

4. Nakamura, K. (2015). Effect is sure, but explanation is not sure: closer investigation to the foreign language effect in Japanese participants. *Proceedings of the Thirty-seventh Annual Conference of the Cognitive Science Society*, pp.1697-1702. (査読あり)
5. 南保輔・古川良治・都築幸恵・新垣紀子・中村國則. (2015). 批判的思考の測定法に関する基礎とその教育的応用に関する研究. *コミュニケーション紀要*, 26, 87-98. (査読無し)

〔学会発表〕(計7件)

1. Nakamura, K. (2016). Harm to myself is not intentional: effects of causal structure and probability on the Knobe effect. *57th Annual meeting of the Psychonomic Society*. Boston, America. (ポスター, 査読あり)
2. 中村國則. (2016). 教えるは知るより高し: 知識・情報における所有効果. *日本認知科学会第33回大会論文集*, pp.453-456. (査読あり)
3. Nakamura, K. (2015). A closer look at the foreign-language effect: investigation with Japanese participants. *56th Annual meeting of the Psychonomic Society*. Chicago, America. (口頭, 査読あり)
4. 中村國則. (2015). 死は death より重い~日本語話者における道徳的判断に対する異言語効果の分析~. *日本心理学会第79回大会論文集*. (査読無し)
5. 中村國則. (2015). Moral は道徳と何が違うか~道徳判断における異言語効

果の分析～日本認知科学会第 32 回大会論文集, pp.226-229. (査読あり)

6. 中村國則・神田咲. (2015). 量刑判断に対する被疑者の写真の影響. 日本認知科学会第 32 回大会論文集. pp.828-830. (査読あり)

7. Nakamura, K. (2014). Does wrong prediction by experts provide more support than that by novices? 55th Annual meeting of the Psychonomic Society. Long Beach, America. (ポスター, 査読あり)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称 :
発明者 :
権利者 :
種類 :
番号 :
出願年月日 :
国内外の別 :

取得状況 (計 件)

名称 :
発明者 :
権利者 :
種類 :
番号 :
取得年月日 :
国内外の別 :

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中村 國則 (Nakamura Kuninori)
成城大学・社会イノベーション学部・教授
研究者番号 : 40572889

(2) 研究分担者

()

研究者番号 :

(3) 連携研究者
()

研究者番号 :

(4) 研究協力者
()